

令和元年6月3日現在

機関番号：32632

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2018

課題番号：25770092

研究課題名(和文) 中世王朝物語の生成過程解明のためのジャンル横断的研究

研究課題名(英文) Cross-genre Research to Clarify How Chusei Ouchou Monogatari Cycle were Formed

研究代表者

藤井 由紀子(青谷由紀子)(Fujii, Yukiko)

清泉女子大学・文学部・准教授

研究者番号：70551943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世王朝物語を対象に、作り物語がいかにして生成するのかを考察したものである。具体的には、『兵部卿物語』(作者・成立年代とも不明)について分析した。『兵部卿物語』の本文の詳細な検討により、『源氏物語』『狭衣物語』を組み合わせる特徴を指摘した。また、『徒然草』から強い影響を受けていること、物語内の地理が平安・鎌倉期の京都とは一致しないこと、文法・語彙が室町期以降の使用傾向を持つことなどから、成立年代は室町期以前には遡れないことを明らかにした。以上の研究成果は、『兵部卿物語全釈』(武蔵野書院、2019年)にまとめ、刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『兵部卿物語』は、中世王朝物語の中でも研究の進んでいない作品であり、先行論文の数も少ない。これまでに注釈・現代語訳も発表されているが、最新のものでも二十年以上前のものであった。そのような状況下で、本研究の成果が注釈書というまとまった形で刊行されたことは、研究の進展に大きく寄与するものであることは間違いない。また、これまで『兵部卿物語』には入手しやすい活字テキストが存在しなかったため、現代語訳も付された本書の刊行によって、一般にも本物語が広く知られる契機を作ることができたと思う。

研究成果の概要(英文)： This study considered Chusei Ouchou Monogatari cycle to clarify how 'Monogatari' was formed for. Specifically, I analyzed Hyoubukyo Monogatari (unknown for both author and age).

On detailed examination of Hyoubukyo Monogatari, I pointed out that this story has a feature that quotes The tale of Genji and Sagoromo Monogatari in combination. Moreover, it was made clear that this story doesn't date back to the Kamakura period. That is because the influence from Essays in idleness (Tsuzuregusa) is strong, the geography in the story is not consistent with Kyoto in the Heian-Kamakura period, and the grammar and vocabulary have features after the Muromachi period. The above-mentioned research results have been put together in "Hyoubukyo Monogatari Zenshaku" (Musashino Shoin, 2019).

研究分野：日本古典文学

キーワード：中世王朝物語 兵部卿物語 ジャンル横断 注釈 源氏物語享受 狭衣物語享受 徒然草享受

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

鎌倉・室町時代に成立したとされる物語群(以下、「中世王朝物語」と称す)の研究を開始するにあたり、以下2点の研究状況を問題点として指摘した。

(1) 中世王朝物語研究全般の状況

中世王朝物語研究は、伝本調査の進展や活字テキストの整備に伴い、近年急速に進んできたと言える。しかし、各物語の成立事情については不明な点が多く、いまだ確定的なことが言えない部分が多い。二十篇以上の物語をすべて「中世王朝物語」とまとめて捉えることに対しての疑義も呈されており、個々の物語の成立事情について、さらなる考究が必要である。

(2) 各作品研究の状況

中世王朝物語は、先行する諸作品からの模倣が甚だしいことが認められているが、それらの模倣個所の指摘は、『源氏物語』『狭衣物語』などの平安物語からのものに偏っていた。後代の物語に対する『源氏物語』『狭衣物語』からの影響は絶大であり、模倣個所の精査は引き続き必要となるが、中世王朝物語の成立状況をより明らかにするためには、物語以外のジャンルの作品からの影響についても検討の対象を広げる必要がある。

2. 研究の目的

中世王朝物語を対象として、作り物語がいかに生成されていくのかを考究する。物語日記 説話 などの諸ジャンルの作品が、相互に影響を与え合っている様相を明らかにしたい。具体的には、『兵部卿物語』を取り上げ、この物語が何を基盤として成り立っているのかを解明した上で、文学史上での位置づけを試みる。

3. 研究の方法

『兵部卿物語』は、作者・成立年代とも不明な作品である。伝本も二本のみしか知られておらず、情報を得ることのできる外部資料もほとんどない。研究史においては、宮田和一郎による注釈(1956)、妹尾好信・淵野百合子による訳注(1992・1993)があるが、後者でさえ既に四半世紀前のものであり、中世王朝物語研究の進展を踏まえた最新の注釈の提供が必要である。よって、本研究では、まずは、物語本文の精緻な読解作業を優先的に行い、その結果を踏まえた上で、本物語がどのような環境下で作られたのかを分析していくこととした。注釈作業において特に注力したのは、以下の二点である。

(1) 文法・語彙の分析

『兵部卿物語』の本文については、文法の乱れが顕著である点、また、近世的な語彙が用いられている点などが、既に部分的に指摘されている。よって、まずは、文法・語彙の調査を行う。比較的分量の少ない作品であるため、すべての語釈を行い、本文全体を通した文法・語彙の使用傾向を分析する。語釈においては、ジャンルを問わず、さまざまな先行作品にあたって用例調査を行い、強い関係性の疑われる作品をピックアップしていく。これらの作業によって、成立年代の手がかりをつかんでいく。

(2) 表現・構想の分析

『兵部卿物語』の作品構想の根幹に、『源氏物語』『狭衣物語』からの影響があることについては、既に指摘がある。それぞれの模倣個所についての再検討を進め、どのような形で『源氏物語』『狭衣物語』が受容されているのか、その具体相を明らかにする。また、本文の表現に関わる徹底的な用例調査によって、物語以外のジャンルの先行作品からの影響についても明らかにする。

4. 研究成果

本研究期間の前半においては、「ジャンル」という概念自体の整理を行った。後半においては、『兵部卿物語』の注釈作業を通して、作り物語の生成について考究した。以下、4点に分けて、その成果をまとめる。

(1) 古典文学における「ジャンル」概念の整理

本研究の前提として、我々が今日「ジャンル」と呼ぶ概念が、古典文学においてどの程度自覚されているのかを考究した。

まず、物語と日記の交渉について考察し、物語が日記をどのように意識しているのかを検討した。具体的には、『源氏物語』を例に、先行する『蜻蛉日記』の本文を取り込みつつ、日記が物語の対極的な存在として位置づけられていること、また、物語中に光源氏の「日記」が登場するにもかかわらず、明確な位置づけを得ないまま消えてしまうことなどを指摘した。つまり、『源氏物語』には明確なジャンル意識があり、一人称で語ることと三人

称で語ることを峻別していると指摘した。

また、中世王朝物語を含めた 物語 と 説話 との交接について、「夢」という具体的なテーマを時代順に辿りみることによって検証した。物語 と 説話 には、根底には「夢」に対する同じ概念があるものの、語る ことの主眼をどこに置くかで描かれる要素が異なってくる。すなわち、説話 は必然的に宗教性が強くなり、物語 は話の展開を導くことが優先される。ただし、時代が下るにつれ、物語 には 説話 的な「夢」が描かれることが増えてくる。中世王朝物語においての神仏の位置づけの問題ともかかわるが、物語 と 説話 の隔絶は、『源氏物語』に最も顕著に見られ、それ以降は、むしろ距離が縮まっていくことを指摘した。

以上の考察によって、「ジャンル横断」的に中世王朝物語を分析することには、一定の有意性があることを確認した。

(2) 『兵部卿物語』における先行物語からの影響

注釈作業を通して、『兵部卿物語』における先行物語からの影響についての再検討を行った。

従来指摘されていた通り、『源氏物語』『狭衣物語』からの影響が大きいことは動かない。具体的には、『狭衣物語』の飛鳥井女君が源氏宮のもとに出仕していたらどうなったのか、『源氏物語』の浮舟が入水せずに深山に身を隠していたらどうなったのか、という、描かれなかった「もしも」の物語を描くことが作品構想の根幹にあることを指摘した。

ただし、本物語には、他の中世王朝物語にまみ見られるような、『源氏物語』『狭衣物語』の特定の巻・場面のみに依存した模倣は少ない。『源氏物語』の別の巻の二つの場面を組み合わせる例や、時には二つの作品を跨いで、複数の場面を組み合わせる例が見られ、従来、「寄木細工」とも称されてきた『兵部卿物語』の表現は、柔軟な模倣のありようによるものであることを明らかにした。

また、『狭衣物語』の場面を引用する際に、その場面に基づいている『源氏物語』の場面もあわせて引用されることを発見した。つまり、『兵部卿物語』は、『狭衣物語』の『源氏物語』引用を正確に読み解き、源泉に遡って模倣するという手法を用いているのである。作者は、相当に平安期物語に親炙した人物であることが想定できた。

あわせて、従来、『狭衣物語』からの影響は巻一からの指摘に偏っていたが、巻四の故式部卿宮姫君に関連する箇所からの影響がかなり強いことを指摘した。また、乳母関係の要素には、『住吉物語』からの直接的な影響がある可能性を指摘した。中世王朝物語相互の関係性については調査が及ばない部分が多かったが、『石清水物語』に類似する箇所が多いことを指摘した。

(3) 『兵部卿物語』成立年代の推定

『兵部卿物語』に大きな影響を及ぼしたと考えられる他ジャンルの作品として、『徒然草』が挙げられる。従来、最終場面での男君の姿の描写に『徒然草』四四段の影響があることが指摘されていたが、特定の場面の模倣のみならず、語彙の面でも、『徒然草』を初出とする用例が散見されることを指摘した。『兵部卿物語』の成立については、鎌倉時代説と南北朝以降説に分かれているが、『徒然草』が広く享受されるようになったのが十七世紀以降であることを考えると、室町期以前には遡れないことを指摘した。

成立時期の推定に関わる要素としては、他にも、以下の3点が特筆される。

『兵部卿物語』が依拠している『狭衣物語』の本文が古活字本等の流布本系統である。(片岡利博(1979)の指摘による)

物語内に描かれる地名(今出川、西の京、北山)の位置関係が、主人公の移動をもとに再現すると、いわゆる「平安京」の地理とは矛盾する。整合性を見出そうとするならば室町期まで下らなければならない。ちなみに、「今出川」は平安の仮名文学には用例がなく、文学作品における初出は『徒然草』である。

絶対敬語の誤用、四段活用と下二段活用の混同など、文法の乱れが顕著である。平安語彙の誤用も目立ち、特に慣用表現的なものの中には近世的な言い回しが散見される。

以上のように、本物語が室町期以降の成立であることを裏付ける要素が複数見出せた。正確な成立時期は特定できないものの、鎌倉期成立説は斥けることが可能であろう。のみならず、近世期になんらかの手が加えられた可能性もあることを指摘し、本物語を「中世王朝物語」と呼ぶことに対して、再検討の余地があることを提示した。

(4) 『兵部卿物語』注釈書の刊行

(2)(3)の研究成果をまとめ、『兵部卿物語全釈』(武蔵野書院、2019)として刊行した。

先行の訳注は、『続々群書類従』所収の活字本文を底本にしており、本文の段階で問題があった。当該書では、底本に慶應義塾図書館蔵本を用い、実践女子大学蔵本で校合することによって、信頼に足る本文を提供することができた。

(2)(3)で述べた新たな知見については、「注」の形で公表した。論文数自体が少なく、中世王朝物語の中でも研究が進んでいるとは言い難い状態にあった『兵部卿物語』において、詳注の刊行は、研究の進展に大きく貢献するものとなるだろう。

また、『兵部卿物語』は、これまで簡便な活字テキストが刊行されてこなかったため、認知度の低い作品であった。当該書には、「注」のみならず、「現代語訳」ならびに作品鑑賞のための「評」も収めることで、物語内容が理解しやすい構成とした。これにより、一般への研究成果

の還元も十分に行えたと考える。

以上、研究期間前半では(1)、後半では(2)～(4)の研究成果をあげることができた。ただし、今後の課題として積み残した点もある。それは、中世王朝物語相互の関係性についての考察が不十分であったことである。すべての作品をデータ化し、類似個所を一覧化することを目指していたが、諸事情により、作業を終わらせることができなかった。他ジャンルの作品についても、目標としていた御伽草子(室町物語)との関連性については考察が及ばなかった。いずれも作業自体に相当の時間がかかるものであるため、今後も継続して行っていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

藤井由紀子、光源氏の「日記」考、文学、査読無、16-1、2015、93-107

藤井由紀子、中古文学概論 「物語」と「日記」、清泉女子大学教職課程紀要、査読無、2、2017、7-12

〔図書〕(計2件)

荒木浩(編)、藤井由紀子 他、法蔵館、夢見る日本文化のパラダイム、2015、564(64-91)

秋本吉徳、藤井由紀子、武蔵野書院、兵部卿物語全釈、2019、138

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：秋本吉徳

ローマ字氏名：Akimoto Yoshinori

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。